

最高学部

2024 年度ネパールワークキャンプについて

神 明久

1990 年から続けてきたネパールでの植林活動も 3 年間のコロナによるギャップも含め 35 年目を迎え、植え付けを行った植林地も計 5カ所となった。今年度は、この活動地域での活動に一旦切りをつけるため、現地での植林地における樹木調査及び現地での関係者へのインタビュー調査に加え、現地でのセレモニーを行うこととした。また、例年行っている活動地域内の学校との交流も行うこととした。今回のワーク実施期間は 8 月 1 日から 21 日までの 21 日間で、学生の参加者 16 名に加えて、教員が神、小田、夏井の 3 名の計 19 名だった。

以下に、現地での活動について 1～4 を述べ、最後に総括を述べる。

1. 現地での植林地調査

5カ所ある植林地のうち、ゴサイクンダ森林利用者グループ (Forest User Group) の管理するコミュニティフォレスト (総面積 47ha) のうち植え付けを行った 8 エリアの中から、Plot.1 と Plot.2 について、樹木調査を計 5 日間行った。具体的には、エリア内に生育している樹木の樹種、樹高および胸高直径を測定し、それぞれの樹木の特徴を記録した。さらに、植え付けたエリアのおよその面積測を計測した。また、スンドルバスティーの管理するエリアでも樹木調査を行った。こちらの植林地では、2010、2013、2016 年に植林して、2018 年に毎木調査を行ったスーガンダコキラという樹木に関して、ゴサイクンダ同様、樹高と胸高直径を測定した。

2. 現地での聞き取り調査

植林地の森林利用者グループ関係者及び活動地域の学校関係者に対して、現在の Community Forest の利用状況やこれまで共に植林活動を行ったことへの評価等に関するインタビュー調査を行った。具体的には、予め計画された項目と、調査の際の話に関する発展の質問を加え、株式会社かんぼうの長氏と参加スタッフの夏井先生に通訳の協力をいただき、小田先生が質問する形式でインタビュー調査を行った。植林活動を共にに行ったことへの評価は一样に高いものであったが、現状として生活スタイルの変化により、Community Forest への関わり方が大きく変化している実情が窺えた。

3. 活動地域内の学校との交流および記念植樹

例年、活動地域内の学校を数校訪れて、日本文化の紹介、体操、美術・工作、科学の実験など実技実習系の授業を行ってきた。今回は、調査がメインのため、スウェットガネッシュという学校のみ授業を行った。内容としては、①日本の紹介 ②自由学園の活動紹介 ③日本の歌 ④折り紙を英語で行った。今回は、ネパール語を学部の講義で履修している人が数名おり、準備の段階からネパール語の説明も組み込んだ形だった。また、昨年要望があった校内での記念植樹も行った。モモ、カキ、キンカン、などの果樹 9 種、計 16 本をネパールの生徒と日本の学生で植え付けた。苗代 (日本円で 4,000 円) は学園が田中ラダ基金から支出した。最後に、リクエストもあり、全校生徒の前で、日本の歌とソーラン節を披露し、お返しにネパールの生徒からの歌と先生からネパールのダンスのパフォーマンスがあった。

4. 現地での記念のセレモニー

8 月 16 日 (金) 午後 15 時より記念のパーティを開催した。参加者は、ワークキャンプメンバーの他、森林利用グループ、地域学校スタッフ、日本からのツアー参加者、自由学園学園長、現地スタッフなどで、プログラムとしては、学園長からの言葉、35 年間を振り返って (夏井)、学生による日本の歌やダンスの発表、その後、立食形式での交流会という内容だった。今回は、現地でのアドバイスもいただ

き、ネパール式のパーティ形式をとったがこれがとても好評だった。参加学生も、ネパールの参加者たちと積極的にコミュニケーションをとる姿が見られた。

5. 総括

今年度の活動は、例年行ってきた活動と内容は似ているが、コロナ禍をはさんだため、以前のワークを経験した学生が一人もいないという点では、特殊だった。ワークでは伝統的に学生自身が活動を組み立てる。しかし、今回はあらゆることに関して、学生間では誰も教え合うことができない状況だった。それでも、一人一人が良く考えて、準備をし、現地での活動を行った。結果は、もちろんうまくいかなかったこともあったが、出発前に心配していたことのほとんどは不要だった。特にコミュニケーションに関しては、言語がうまく使える使えないにかかわらず、積極的にチャレンジする等、通常の学校生活では見られないような面に驚かされた。学校生活の中に設けられた教育カリキュラムの成果は、このような状況下で発揮されるということを改めて実感した。また、1990 年にワークを始めるとき、当時の羽仁翹学園長が望まれた、日頃培った力を海外で発揮してほしいとの願いには現在も応えられていると思う。